

徳島市の阿波踊りに参加する企業連の特性 —企業連の実態と参加者の意識に着目して—

中 村 ま い (お茶の水女子大学大学院)

Abstract

The Awa Dance is a festival attracting more than one million tourists in which dancers participate by forming groups called “Ren.” “Ren” is subdivided into several categories such as “famous groups” pursuing high-level dancing, and “corporate groups” consisting of the workers of various companies. The question is whether or not it is worthwhile for the workers to dance in the “corporate groups” by spending so much time and effort. This study takes up corporate groups, examines their realities and then tries to clarify the purpose of workers’ participation by conducting a consciousness survey.

As a result, the corporate groups were found to put great importance on participating in the Awa Dance itself and also to be very generous to the participants on different degrees of practice and contribution. By questionnaire investigation, the participants were found to feel a sense of accomplishment and unity and to reconfirm their belongingness, with its effect being extended to the everyday work.

In comparison with other cases of corporate groups like those of “Yosakoi” family festivals, the inherent characteristics of the Awa Dance itself seem to be what makes it possible and beneficial for the cooperate groups to participate in the festival.

1. 研究背景と目的

徳島市の阿波おどり¹は毎年120～130万人が集まる大規模な祭りであり、その中心となる参加者は県内外から集ってくる。阿波おどりに参加する踊り集団は「連」と呼ばれ、高い技術を持った踊り手で構成される有名連²、学生を主体とする学生連³、企業の従業員を中心とした企業連⁴、気の合った仲間同士で構成される一般連⁵など、さまざまな立場の参加者が存在する。その中でも企業連は、企業PRを目的として阿波踊りに参加し、阿波踊りはまさに「企業を見せる媒体」と言われている⁶。加えて、従業員の慰安や一体感の醸成、地域貢献、経営者によるアイデンティティの確認や威信の表明といった参加理由も挙げられている⁷。

このような企業主体の踊り集団は、全国的な規模の広がりを見せる「よさこい系」祭りでも見られる。出口(2009)は高知のよさこい祭りに参加する企業チームについて、「阿波おどりと比較して連員の集め方がよりオープンであり、公募によって参加できる連が多く見られるのが特徴である」⁸と報告している。一方、札幌のYOSAKOIソーラン祭りの企業チームは一般公募で募った部外者によって構成されている場合が多いと言われている⁹。その理由として矢島は、「練習のための時間が取れない、また祭り当日は業務を休めない企業

が多いため」¹⁰と述べている。

企業の祭りへの参与形態の一つとして企業名を冠したチームを組織することで企業PRや地域貢献という目的は達せられるため、「よさこい」系祭りの企業チームでは踊り手が外部の人間でもかまわないのである。しかし、徳島市の阿波おどりに参加する企業連では、時間と労力をかけて企業の従業員自らが実際に踊っている。ここに注目することで、阿波踊りという芸能の特性が見えてくるのではないだろうか。

伝統芸能・民俗芸能の研究においては、芸能が果たす役割や機能から当該社会の理解を深める立場¹¹から、資料化による保存・活用の試み¹²、実践者への聞き取りやフィールドワークにおける舞踊動作の解明¹³等が行われてきた。これらの手法に加え、実践者の多数が芸能に携わることをどのように考えているのかを明らかにすることによって、社会における芸能やその伝承の意義を補強する一助になると考える。

そこで本研究では、徳島市の阿波おどりに参加する企業連を事例として取り上げる。企業連の活動の実態を明らかにし、参加者への意識調査を通してなぜ彼らが阿波踊りに関わるのかについて明らかにすることを目的とし、その結果から企業連の特性を分析・考察する。これらは、企業連の参加を可能にする阿波踊りの芸能特性への考察につながり、今後、阿波踊りが現代で果たしている社

会的機能を考察する一資料の提示につながると考えられる。

2. 先行研究及び研究方法

2-1. 先行研究

阿波踊りに関する先行研究では、阿波踊りの起源に関する研究¹⁴や観光化の流れを詳細に報告したもの¹⁵など歴史に関する研究が散見される。本研究のように連の実態に着目した先行研究では、有名連と学生連を調査した報告¹⁶が挙げられるが、社会集団としての連の性質を比較した実態報告であった。また、参加者に着目した先行研究には、学生連が阿波踊りの伝承において果たす役割を報告した研究¹⁷や、にわか連の実態を把握しようと試みた報告¹⁸が挙げられるが、質問紙の分析には単純集計が用いられていた。本研究の対象である企業連の多くは営利活動を行う企業のもとに組織され、芸能のために集まっている集団ではない。参加者である企業の従業員は自己の生産活動の一環として企業に属し、各々異なる背景を持っているため、参加目的や参加動機はより複雑な様相を呈しているのではないかと推察される。

企業連に関する先行研究では、企業連の変遷を明らかにした報告¹⁹や企業の関わり方を阿波おどりと高知のよさこい祭りで比較した報告²⁰が挙げられるが、企業連や参加者の参加・活動実態は明らかにされていない。より網羅的・複合的な調査を行うことによってその複雑な様相を明らかにできると考えられる。

2-2. 研究方法

本研究は3つの実地調査をもとに分析・考察を行う。まず、企業連の阿波おどりへの参加・活動実態を明らかにするために①企業連運営に関する質問紙調査と聞き取り調査²¹を行った。さらに企業連の参加者が参加することをどのように捉え、どのような実感を得ているのかを明らかにするために②企業連参加に対する質問紙調査²²を行った。前述のように、参加者の動機や効果に対する意識は複雑な様相を見せると推測されたため、回答結果の解析にはSPSS Statistics21を用い、統計解析を行った²³。また、これらの結果を補足するために③企業連の練習への参与観察²⁴を並行して行った。

論の進め方としては、まず、企業連の運営・活動実態から企業連の特性を明らかにする。次に、参加者に対する意識調査の結果からなぜ参加者が阿波踊りに関わるのかを明らかにする。これらの結果は阿波踊りの舞踊特性を示すことにつながると考えられる。

3. 結果と考察

3-1. 企業連の運営・活動実態

3-1-1. 対象とした企業連について

徳島市の阿波おどりにおける企業連の特性を、企業連担当者を対象とした連運営についての質問紙調査と聞き取り調査の結果から考察する。

まず、対象とした企業の基本情報を表1に示した²⁵。対象とした企業は全て県内に本社または支社・支店を有している。各企業連の参加者構成について確認すると、A社の連では業務として参加者が四国四県から招集されていた²⁶。B社のみ全国規模で社内公募が行われ、参加者は全国各地から集まっていた。C社、D社、E社の連は任意の参加者のみで構成されていた。F社の連では任意の参加者に加え、新入社員の参加が原則になっていた²⁷。

表1 調査の対象とした各企業と企業連に関する基本情報

	本社所在地	会社規模 (総従業員数)	参加者の 範囲	練習場所
A	県外	約17万名	四国四県	徳島県内
B	県外	約1万名	全国各地	東京、大阪、 徳島
C	県内	約3千名	徳島県内	徳島県内
D	県内	約2千名	徳島県内	徳島県内
E	県外	約1千名	徳島県内、 一部県外	徳島県内
F	県内	約1千名	徳島県内	徳島県内

3-1-2. 企業が阿波おどりに参加する理由

各企業連が阿波おどりに参加する理由・参加意義をまとめて表2に示した。「地域社会に貢献(A社)」、「地域活性化(D社)」、「地域とのふれあい、関わり合い(F社)」等、地域についての言及が確認され、地域貢献であるという意識が共通して見られる。また、6社中4社が「企業価値向上」・「企業イメージの向上」等を挙げている。

さらに、社員同士の繋がりを強化したいという意図がA社とB社の回答で見られた。特に、A社では四国内の支社・支店の団結力を高める為に阿波おどりへの参加を始め、参加者は四国の各県から集められ、約2か月半の定期的な練習を積んで本番に臨んでいる。本番当日は事務方のサポートも加わり、連全体で一丸となって演舞の成功の為に尽力するが、普段は離れた地で業務を行う者同士が共同して芸能実践を行うことに組織の連携強化という効果を期待していると考えられる。

以上の結果から、企業は企業PR以外に地域貢献

表2 6社の企業連が阿波おどりに参加する理由とその意義

企業	阿波踊りに参加する理由	阿波踊りに参加する意義
A	1. 企業イメージを高める為 2. 地域社会に貢献する為 3. 社員の活力・団結力を高める為	左に同じ 2が大きい
B	社内における徳島プレゼンスup 徳島における企業プレゼンスup 連員における横々の連携強化 (社内・グループ内・社外) 社内CSR活動の一環	徳島最大の祭りに参加することで徳島への貢献を具現化することができる
C	県下最大のイベントである「徳島市阿波おどり」への参加を通じて、「あわ文化の継承」、「観光振興」及び「観光経済の促進」を測る。	徳島の観光PR及びイメージアップに寄与すること
D	企業価値・イメージの向上とX市最古の歴史を持つ連の創始者より伝統ある連の名前を受け継ぎ結成された連名を継承するため	郷土の伝統文化継承 地域活性化 企業価値向上
E	初期: 会社行事(福利厚生) 中期: 会社行事ではなくしたが、有志により続ける、費用は労働組合・有志会で 近年: 有志会で継続、費用の一部を会社に補助してもらう H27年～半会社行事、費用の大部分を社にみてもらう	グループとして、地域文化に協力がはかれる等、良好な対関係の維持に効果があり、会社のPRにおおいに貢献する
F	ふるさとと共に歩む企業として地域とのふれあい、関わり合いを大切にしたいと考え、地域の行事、会合等に積極的に参加している	左に同じ

※H30年8月実施の企業連担当者を対象とした企業連運営に関するアンケートより抜粋

組織の連携強化という参加目的を持っていることが確認された。

3-1-3. 企業連の阿波おどり参加について

平成30年度阿波おどり運行表から得られたデータをもとに表3、表4を作成した²⁸。

表3は、平成30年度の阿波おどりに参加した各連の数をまとめたものである²⁹。企業連は全体の約3割を占めており、そのうち86連(75%)が有名連や一般連と合同で出演している³⁰。企業連が他の連に合同出演を依頼する理由として、①鳴り

表3 市内10カ所の有料・無料演舞場での出演連数

	有名連	企業連	学生	宗教 その他(県外)	一般連 (県内)	一般連 (県外)	合計
連数	33	114	25	36	44	85	338
割合	10%	34%	7%	11%	13%	25%	100%

※H30年度徳島市の阿波おどり各演舞場運行表より作成

表4 市内10カ所の有料・無料演舞場における各連の出演回数(4日間合計)

	有名連	企業連	学生	宗教 その他(県外)	一般連 (県内)	一般連 (県外)	合計
連数	324	277	131	67	140	426	1365
割合	24%	20%	10%	5%	10%	31%	100%
1連あたりの平均出演回数	9.8回	2.4回	5.2回	1.9回	3.2回	5.0回	4.0回

※H30年度徳島市の阿波おどり各演舞場運行表より作成

物³¹を借りるため②演舞の質を補うため③有料演舞場³²の優先出演権を獲得するためということが挙げられる。鳴り物一式の購入・保管には費用がかかり、演奏者を確保し育てることも難しい。そのため、企業連では鳴り物演奏を委託する形態がよく見られる。また、企業連では練習量を十分に確保することが難しいので、「見世物」としての踊りの質を担保するといった意図も見受けられる。加えて、有名連と合同で出演すると有料演舞場の出演権が優先的に得られることも要因として考えられる。

次に、4日間での出演回数を比較してみる(表4)。有名連や一般連、学生連と比較して、企業連では1連あたりの平均出演回数が少なく、約2.4回である。期間中1日だけ参加し2~3カ所の演舞場を回るという参加形態が企業連にはよく見られ、短時間に凝縮された参加を楽しむ形態であると言える。

このような参加の実情を踏まえると、踊りの熟練度を上げて観客に見てもらふ事を目的に組織される連と比較して、企業連は参加することに重点を置いており、他の連の力を借りてでも凝縮された体験を連員で共有することを重視していると考えられる。

3-1-4. 企業連の練習について

各企業連の参加者構成や練習内容についてまとめたものを表5に示した。

B社は鳴り物を持たず、C社以外は隊形変更や踊りに変化をつける演舞構成³³を採用している。D社、E社は練習指導を連員自らがを行い、演舞構成も連員が独自に考えている。他の4社は練習指導・演舞構成を有名連や一般連に委託している。練習期間は2~4か月間、練習時間は合計10~30時間程度であり、通年で練習を行っている有名連や一般連と比べると明らかに少ない。そのうえ、

表5 6社の企業連の構成・練習について(回答結果の抜粋)

設立年	継続年数	構成人数	鳴り物の有無	練習回数	練習時間(1回あたり)	練習場所	隊形変更	指導者	参加者の住所	
A	1990年	28人	114人(有名連と合同)	13回	2時間	有名連練習場	有	有名連	四国四県	
B	2014年	4年	139人(有名連大阪3回に委託)徳島5回	5回	2時間	社内(一部他施設)	有	有名連	全国各地	
C	1984年	34年	181人	有	5回	2時間	関係施設	無	一般連	徳島県内
D	1989年	29年	96人	有	26回	1時間	社内	有	連員	徳島県内
E	1975年	43年	92人	有	10回	3時間	他施設	有	連員	一部(県外)
F	1951年	67年	158人	有	9回	1.5時間	社内	有	有名連	徳島県内

※企業連担当者を対象とした各連の運営に関する質問紙を元に作成

業務の都合上なかなか練習に参加できない従業員がどの連にも存在している。連員の指導や演舞構成を自ら行う連であっても参加者の参加の度合いにはばらつきがあり、毎回参加し連員を指導する者もいればやむを得ず本番まで練習に参加できない者もいる³⁴。演舞の内容も経験者による見事なフォーメーションを組む場合もあれば、基本の振りだけで前進するだけという場合もある。企業連担当者も参加者の事情や技術力を考慮した上で、演舞構成や練習内容を整えていくのである。

以上の結果から、阿波踊りへの取り組み方は企業連ごとに異なり、さらに一つの連の中に参加の度合いの異なる参加者が共存していることが分かった。熱心に練習に参加し演舞構成を考える者もいれば、練習に参加できない者もいる。どのような参加者も受け入れる姿勢が企業連には見られ、練習参加に対して寛容な面が確認された。企業連全体の75%が他の連の協力を得て参加に重点を置いていることを加味すると、多くの企業連は参加者の練習が少なくとも本番当日に参加できることを重視していると考えられる。一方で、踊りや鳴り物の構成に工夫を凝らし、修練を積んでいる企業連も存在している。企業連自体の在り方も多様で、さらに一つの連の中での参加者の在り方・関わり方も多様であることが確認された。

3-1-5. まとめ：企業連の特性

ここまでの結果と考察から、企業連は阿波踊りを「踊る」という目的以外に、企業PR、地域貢献、組織の連携強化を目的として参加しており、「参加する」ことを重視していると考えられる。企業連では踊るという目的と併せて企業PR等その他の目的があり、これらの達成のために多数の参加者が必要になってくる。参加を重視する企業連では練習できない者も許容され、さらに企業を母体に行っているからこそ、参加者それぞれの状況を加味することもできる。その結果、参加の度合いの異なる多様な参加者が関わる状況が生み出される。企業連自体に複数の参加目的があるからこそ、多様な参加者を許容することが可能になるのである。

3-2. 参加者への質問紙調査の結果と考察

3-2-1. 対象について

参加者がどのような動機で企業連に参加し、どのように個人へ還ってくる体験だと捉えているのかを質問紙調査の結果から分析・考察する。

分析の対象とするのは、6社の企業連参加者792名を対象とした選択式質問紙（回収数349、回収率49%）のうち、「阿波おどりへの参加動機」³⁵（24項目）と「参加したことで得られた効果」³⁶（24項目）に対する回答結果である。回答には5件

法³⁷を用いた。

回答者349人のうち2割（68人）が今年度初めて企業連に参加すると回答し、徳島県内に居住している者は回答者の8割（274人）、企業連以外での阿波踊り参加経験がある者は3割（100人）ほどであった。

3-2-2. 参加動機

参加動機に関する質問への回答に対し因子分析を行い（ $N = 338$ ）³⁸、最終的に3因子構造の結果を得た（表6）³⁹。第一因子は、「組織の一員としてやるべきだから」という義務感や「参加しないと悪く思われる」等、周りからの評価を気にする項目に高い負荷量が見られた為、【外部への調整と義務感】と名付けた。第二因子は「踊りや鳴物をやってみたかった」等、阿波踊りに対する個人的な関心や「上手になりたい」等、個人の満足感に関する項目が見られた為、【自己実現・自己充実】と名付けた。第三因子は「連帯感を感じることができるから」等、周りとの関係性に言及した項目や「企業の一員として地域に貢献すべきだから」という組織への帰属意識を感じさせる項目が見られた為、【組織・仲間との一体感】と名付けた。クロンバックの α 係数は第一因子では0.924、第二因子では0.843、第三因子では0.824であり、内の整合性が確保されていた。

表6 【動機】パターン行列と因子相関行列

	第一因子: 外部への 調整と義 務感	第二因 子:自己 実現・自 己充実	第三因 子:組織・ 仲間との 一体感	共 通 性
参加が必須という指示	.918	-.006	-.125	.778
参加しないと悪く思われる	.893	.140	-.186	.736
参加しないと迷惑をかける	.868	-.027	-.089	.706
業務の一環としてすべき	.803	-.220	.159	.729
組織の一員としてやるべき	.742	-.190	.217	.669
会社や上司に認められたかった	.720	.334	-.035	.656
演舞場で踊ってみたいかった	-.027	.811	-.071	.597
阿波踊りの衣装を着てみたいかった	.268	.741	-.116	.566
踊りや鳴物をやってみたかった	-.297	.628	.081	.485
気分転換になるから	-.064	.583	.129	.428
祭りが持つ非日常の気分を味わいたい	-.018	.581	.091	.400
達成感を味わいたい	.013	.493	.290	.486
上手になりたい	.061	.447	.234	.387
他の社員とコミュニケーションがとれる	-.183	-.013	.715	.444
連帯感を感じることができる	-.016	.151	.630	.515
企業の一員として地域に貢献すべき	.172	-.076	.597	.411
所属部署以外でのつながりができる	-.113	.116	.583	.391
一緒に参加する仲間を身近に感じられる	-.055	.153	.538	.384
企業の伝統を守りたい	.379	-.027	.525	.541
会社が参加に理解を示してくれる	.281	.084	.465	.440
信頼性係数	.924	.843	.824	
因子相関行列				
外部への調整と義務感	1.000			
自己実現・自己充実	.114	1.000		
組織・仲間との一体感	.348	.540	1.000	

3-2-3. 参加による効果

次に、参加による効果に関する質問への回答に対し因子分析を行い（ $N = 338$ ）、最終的に3因子構造の結果を得た（表7）⁴⁰。第一因子は、「踊

表7 【効果】パターン行列と因子相関行列

	第一因子 達成感と 一体感の 獲得	第二因子 貢献と愛 着の実感	第三因子 日常業務・ 個人への 還元	共通性
演舞場の空気を味わうことができた	.700	-.028	-.066	.443
気分転換になった	.669	-.127	.195	.478
踊りや鳴物を楽しむことができた	.669	-.020	-.321	.384
祭りが持つ非日常の気分を味わうことができた	.607	.004	-.058	.348
他の社員とコミュニケーションがとれた	.553	.026	.084	.367
所属部署以外でのつながりができた	.553	-.045	.170	.371
立場や年齢を越えて関わり合えた	.547	.166	-.050	.394
達成感を味わえた	.521	.181	-.002	.402
一緒に参加する仲間を身近に感じることができた	.466	.157	.136	.414
企業の伝統を受け継ぐことができた	-.109	.817	.007	.592
企業の一員として地域に貢献できた	.089	.778	-.195	.512
組織に貢献できた	-.052	.680	.114	.539
役割を果たしている充実感があった	.055	.591	.053	.432
企業の一員であることが誇らしかった	.088	.571	.134	.515
会社への愛着を感じた	.168	.469	.153	.469
仕事上で有利な人間関係を作ることができた	-.022	-.149	.911	.662
日常の仕事につながる成果を得られた	-.114	.181	.682	.594
会社や上司に認められた	-.191	.228	.674	.602
運動不足を解消できた	.205	.029	.463	.353
阿波踊りの衣装を着て満足できた	.324	-.078	.451	.351
信頼性係数	.841	.844	.813	
因子相関行列				
達成感と一体感の獲得	1.000			
貢献と愛着の実感	.527	1.000		
日常業務・個人への還元	.376	.658	1.000	

りや鳴物を楽しむことができた」等の阿波踊りへの参加による達成感や「立場や年齢を越えて関わり合えた」等の群舞における他者との関わりについての項目に高い負荷量が見られ、阿波踊りという群舞に参加する事で得られる達成感や一体感に関する内容であると解釈した。そこで第一因子は【達成感と一体感の獲得】と名付けた。第二因子は「企業の一員として地域に貢献できた」等の組織への貢献や「企業の一員であることが誇らしかった」等の組織への好意的な感情を実感できる項目が見られた為、【貢献と愛着の実感】と名付けた。第三因子は「仕事上で有利な人間関係を作

ることができた」等、参加が個人的な利益や満足につながるという項目が見られた為、【日常業務・個人への還元】と名付けた。クロンバックの α 係数は第一因子では0.841、第二因子では0.844、第三因子では0.813であり、内的整合性が確保されていた。

3-2-4. t検定による比較

因子分析によって作成された下位尺度ごとに下位尺度得点⁴¹を作成し、参加者内での群間において有意水準5%でt検定を行った。企業連への参加経験の有無、企業連以外での阿波踊り経験の有無、住所地在徳島県内か県外かで比較を行った(表8, 9)。

まず、企業連への参加経験の有無で比較したところ、動機の第二因子、第三因子、効果の第二因子、第三因子において、経験有りの群の下位尺度得点が有意に高いという結果が得られた。参加経験の有る人の方が初参加の人より参加そのものを楽しみ、組織・参加者同士の連帯を感じることを期待している。加えて、参加という行為が企業への貢献につながると実感され、企業への愛着も増し、その体験が日常業務へ還元されていくと認識されている。回答者の8割が企業連に複数回参加しているということは、実感された効果が次の動機を誘発する要因になっているとも考えられる。阿波踊りへの参加によって踊りを楽しみ、仲間や組織との一体感を得ることができ、それが個人にとって有益だと理解したうえで参加しているのである。

次に、企業連以外での阿波踊り参加経験の有無で比較したところ、企業連以外での阿波踊り経験の有る群の方が、動機の第一因子、効果の第三因子において有意に下位尺度得点が低いという結果

表8 【動機】各因子の下位尺度得点を各群間差で比較した結果

	動機												
	外部への調整と義務感				自己実現・自己充実				組織・仲間との一体感				
	n	M	SD	t値	n	M	SD	t値	n	M	SD	t値	
過去の企業連 有り群	274	3.02	1.30		273	3.86	0.82		276	4.04	0.69		
参加経験 無し群	68	2.71	1.21	-1.79	68	3.53	0.87	-2.87**	67	3.61	0.82	-4.41***	
企業連以外の 有り群	97	2.34	1.00		97	3.72	0.95		98	3.85	0.84		
阿波踊り経験 無し群	241	3.19	1.31	-6.38	240	3.81	0.80	-0.86	241	3.99	0.69	-1.47	
住所地	徳島県内群	271	3.24	1.21		269	3.78	0.86		271	4.02	0.73	
	徳島県外群	69	1.83	0.91	10.70***	70	3.85	0.78	-0.63	70	3.70	0.75	3.28**

M=平均値、SD=標準偏差 *** p<.001 ** p<.01 * p<.05

表9 【効果】各因子の下位尺度得点を各群間差で比較した結果

	効果												
	達成感と一体感の獲得				貢献と愛着の実感				日常業務・個人への還元				
	n	M	SD	t値	n	M	SD	t値	n	M	SD	t値	
過去の企業連 有り群	275	4.28	0.55		275	3.94	0.73		273	3.50	0.98		
参加経験 無し群	67	4.23	0.62	-0.70	67	3.58	0.84	-3.46**	67	3.21	0.82	-2.50*	
企業連以外の 有り群	99	4.35	0.55		98	3.78	0.84		98	3.15	0.93		
阿波踊り経験 無し群	239	4.24	0.57	1.53	240	3.90	0.73	-1.21	238	3.54	0.94	-3.51**	
住所地	徳島県内群	271	4.23	0.55		271	3.96	0.71		270	3.54	0.97	
	徳島県外群	71	4.43	0.60	-2.65**	71	3.50	0.86	4.20***	70	3.08	0.81	4.03***

M=平均値、SD=標準偏差 *** p<.001 ** p<.01 * p<.05

が得られた。これらの因子はどちらも参加と企業を結び付けて考える傾向があるため、「企業の為に参加すべき」「やらないと迷惑をかける」という外発的な要因ではなく、参加によって得られる楽しみや一体感などに起因する内発的な要因が動機になっていると窺える。

居住地が徳島県であるかどうかでの比較では、動機の第一因子、第三因子で県外群の下位尺度得点が有意に低いという結果が得られた。県外からの参加者も内発的な要因で参加していると考えられる。これが効果の第一因子における県外群の下位尺度得点の高さにつながっていると思われる。効果の第二因子、第三因子においては、県内群で有意に下位尺度得点が高いという結果が得られた。居住地、つまり日常業務の場での祭りへの参加の方が、阿波踊りへの参加と企業活動や組織を結び付けて捉える傾向が強いと考えられる。企業の一人としての参加意識が強まり、組織に関わる効果も強く感じられる一方、外発的な要因が参加を強制するような場面につながる可能性も示唆される。

各因子の傾向で特徴的であったものを見ていくと、効果の第一因子ではどの群の下位尺度得点も他の因子と比較して平均値が非常に高く、標準偏差も小さい。唯一、居住地で比較をした場合、県外群の方で有意に下位尺度得点が高いという結果が得られた。全体的に参加者は高い達成感と一体感を得ているが、日常業務・生活の場と離れていることで非日常感をより感じる傾向があるのではないかと推察される。効果の第三因子では、企業連への参加経験が有る群、企業連以外での阿波踊り経験が無い群、県内居住群の方で有意に得点が高いという結果であった。参加が日常へ還元される体験になるということは企業連特有の事象であり、日常業務の場と祭りの場の近接性の影響を受けているとも考えられる。

つまり、参加者は全体的に高い満足感を得ており、特に企業連への参加経験を有していると参加が個人にとって有益だということを理解していると捉えられる。一方、企業連への参加経験を有している、または日常業務と祭りの場が合致している場合には、外発的な要因が反映されることが確認された。このような外発的な要因が動機に影響を及ぼすのは、企業連の特性だと捉えられる。しかし、外発的な要因からの参加であっても、参加者は達成感と一体感を得ることができている。すなわち、企業連への参加は従業員の慰安へつながり、企業という組織内での一体感を醸成し、組織強化に有効であることが確認された。

3-3. まとめ：企業連の参加を可能にする阿波踊りの舞踊特性

ここまでで、多様な参加者が共存でき、一体感

の醸成に有効であるという企業連の特性が確認された。一つの連の中に熟練度や経験・参加の度合いが異なる参加者が存在していても、彼らはその差に関わらず一様に高い達成感と一体感を感じていた。この理由の一つとして、阿波踊りの舞踊特性が挙げられるのではないだろうか。

三室（1967）は阿波踊りが多くの民衆に愛好される理由として、踊りの単純さと速度の急速なことを挙げている⁴²。阿波踊りの動きは2拍動作で完結し、行列形式で踊り、回転・方向転換および拍手の動作がないという特色があるとも述べている⁴³。2拍動作の短い振りは初見でもすぐ覚えることが可能であり、回転や方向転換がない動きは初心者にとってなじみやすい。

また、中村（1995）は、阿波踊りの動きに多様な変化が生まれた要因として、①振りが単純で動きの一まとまりが短いこと、②囃子のリズムは生き生きとした三連符の変形であるが、踊りのリズムが単純な二拍子であること、③踊りの形態が行進型であること、④踊りを踊る集団が伴奏音楽を受け持つ集団と共に行動することを挙げている⁴⁴。両者の指摘を合わせると、基本の振りが単純な2拍動作の短い振りであること、行進型であることが初心者の受け入れを可能にしていると考えられる。さらに、動きの多様化は熟練者がより難しい動きに挑戦することも可能にしている。

また、阿波踊りでは一つの連の中に男踊りや女踊り、女性の男踊りなど役割の異なる集団が存在し、それぞれ異なる動きを担当している。応用した振りにより複雑な演舞構成を担当する者と、基本の振りのみで前進する者とが、別々の隊列で異なる役割を担うことが可能であり、参加者の習熟度に合わせてそれぞれの隊列へと振り分けることができるのである。これらの阿波踊りの舞踊特性が、熟練度や経験・参加の度合いが異なる参加者の共存を可能にし、一体感を醸成するのに寄与していると考えられる。企業連の練習に対して寛容な姿勢もこの舞踊特性に起因していると言える。

さらに、企業名を冠するだけの「よさこい系」祭りの企業チームと、従業員が踊る阿波踊りの企業連との参加の違いもここから生み出されているのではないだろうか。両者の振りを比較してみると、よさこいの振りは比較的長く、踊りについての規定が少ないためチームごとに振りが異なる⁴⁵。振りを覚えた後に踊りとしての一体感を醸成するための踊りこみが必要になり、必然的に一定以上の練習時間が求められ、踊りの質を整えるために練習時間を確保することが必須になってくるのである。

一方、阿波踊りでは初見でも覚えられる振りの単純さ、短さが参加者の幅を広げることを可能に

し、その舞踊特性が多様な参加者間での一体感の醸成に寄与している。踊りの質を上げることにこだわる企業連も存在するが、多くの企業連は参加者同士での連帯感を醸成することや、参加し踊りを楽しむことに重点を置いている。このように、それぞれの踊りの特性が「よさこい」系祭りや阿波おどりにおける企業チーム・企業連の参加の違いにつながっており、阿波踊りの舞踊特性が企業の従業員の踊り参加を可能にしていると指摘できる。

4. 結論

本研究を通して、複数の阿波踊りへの参加目的を持ち、多様な参加者の参加を可能にする企業連の特性が確認された。企業連の参加者は全体的に高い満足感を得ており、参加が個人にとって有益だということを理解している者が多数存在する。一方、外発的な要因が参加につながることも確認され、企業連への参加経験や日常業務と祭りの場の近接性が影響を与えていた。しかし、外発的な要因からの参加であったとしても達成感や一体感を感じられており、企業連への参加は従業員の慰安につながり、企業という組織内での一体感を醸成し、組織強化に有効であることが確認された。

また、「よさこい」系祭りにおける企業チームとの比較によって、阿波踊りの舞踊特性が企業連の多様な参加者の参加を可能にしていることが明らかになった。初見でも参加が可能であり、熟練度や経験・参加の度合いが異なる参加者間での一体感を醸成する舞踊特性が参加者の幅を広げ、参加者同士の一体感や達成感を優先する企業連の参加実態にもつながっている。練習参加への寛容さが参加しやすい状況を生み出すのか、企業連で阿波踊りを初めて体験する者も多数存在する。参加者の裾野を広げ、阿波踊り参加の機会を提供していると捉えると、企業連が阿波踊りの継承・普及に貢献している側面もあるのではないだろうか。

本研究では、現代における阿波おどりの企業連・参加者の実態から阿波踊りの舞踊特性について言及することを試みた。今後は、さらに広く芸能研究の先行研究にあたり、その上で都市祝祭や祭礼に関する社会学的知見との検証を行うなど、芸能の域からより広範な社会的事象へと議論を展開していくことを課題としたい。

謝辞

本研究は多くの方のご協力のもとで成立しました。研究に際して多大なご協力をいただいた各企業の皆様、阿波踊り関係者の皆様、研究をご指導いただいた福本まあや先生、ならびに、匿名で査読され、数々の適切なお助言をいただいた3名の先生方に心より感謝申し上げます。

上げます。

- 1 本論文では、祭りの中で踊られる舞踊を指す際には「阿波踊り」、祭り自体を指す場合には「阿波おどり」の表記を用いる。
- 2 阿波おどり振興協会、徳島県阿波踊り協会等に加盟する阿波踊り連33連を有名連と言う。(出典：阿波おどり会館ホームページ https://awaodori-kaikan.jp/famous_series/ R1年8月22日最終閲覧)
- 3 学生連とは、大学生などの学生を主体として組織される連である。課外活動(部活やサークル)として通年で活動している連もあれば、大学で同じ学部や学科に所属している縁により阿波踊りの時期だけ集まって組織される連もある。
- 4 企業連とは、一般的に企業が母体となる阿波踊りのチームを指し、官公庁の連とは区別して考えられている。本論文では、「職場の縁をもとに組織される連」と捉え、官公庁の連も企業連として捉えた。
- 5 徳島県阿波おどり保存協会などに所属している連や、友人・知人らで声をかけあって結成されるような連を本論文では一般連と称する。
- 6 高橋晋一 2015「阿波踊りの観光化と『企業連』の誕生」『国立歴史民俗博物館研究報告』193:233.
- 7 出口竜也 2009「企業と祭り 阿波おどりと高知よさこい祭りを事例に」中牧弘允編『産業と文化の経営人類学的研究』大阪：国立民族学博物館：199.
- 8 出口，2009，203-204.
- 9 矢島妙子 2015「『よさこい系』祭りの都市民俗学」東京：岩田書院：159.
- 10 同上。
- 11 遠藤は舞踊人類学の動向を整理し、当初は非ヨーロッパ世界、非工業化社会、無文字社会の理解を深める研究対象の一つとして舞踊が着目され、美的側面のみならず社会的有用面に対しても評価がなされてきたが、第二次世界大戦後、研究対象の拡大に伴い本格的な研究が進み、舞踊そのものを中心的な研究テーマとする国際動向を概観している(遠藤保子 1999「舞踊人類学研究の国際動向」『体育学研究』44(4):325-333).
- 12 近年、無形文化遺産の保護・継承・活用に注目が向けられている。橋本は、法の整備下において民俗芸能が文化財・観光資源としての社会的文脈を付与された「無形民俗文化財の社会性」を指摘しており、それが地域社会を再生させる手がかりとして重要であると捉え、積極的な文化財保護を推奨している(橋本裕之 2016「無形民俗文化財の社会性：現代日本における民俗芸能の場所」『追手門学院大学地域創造学部紀要』1:121-131)。また、遠藤らはアフリカの舞踊を対象にモーションキャプチャによってデジタル・アーカイブ化を行い(遠藤保子・八村広三郎・崔雄 2008「今日のアフリカの社会と舞踊の記録・保存・伝承-ケニアの舞踊とモーションキャプチャ」『アート・リサーチ』8:15-24)、その結果を日本の小学校教育に活用するための教材へ応用する(遠藤保子・相原進・高橋京子 2018「アフリカの舞踊に関するデジタル・アーカイブと教育的活用」『立命館大学産業社会論集』53(4):69-84)など、活用に向けての積極的な試みも行われている。阿波踊りにおいても学校教育の教材化のための研究が行われている(中村・高橋 2008「徳島県の伝統文化『阿波踊り』の教材化に向けた基礎的研究」『日本女子体育学術研究』25:1-12)。
- 13 弓削田は仏舞の舞踊表現に焦点をあて、演舞のVTR、稽古の観察、現地に伝わる舞踊譜・指導書等を資料とした実技面の分析から3つの仏舞における身体運動学的な特性と共通項を導き出し、仏舞の演出意図と表象を解明し身体運動学的アプローチの有効性を

- 提示した。(弓削田綾乃 2009「仏舞の伝承的身体表現:身体運動学的分析と来迎思想を手がかりとして」『スポーツ人類学研究』2008 (10・11): 10-58)
- 14 中村久子 1996「阿波踊り起源説について」『徳島大学総合科学部人間科学研究』4: 23-36.
- 15 関口 寛 2007「昭和初期・徳島における観光産業振興と阿波踊り」『凌霄』14: 1-23.
- 16 高橋晋一 2000「連のエスノグラフィ」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』7: 27-42.
- 17 川内由子 2017「『四国大学連』にみる阿波踊りの伝承における学生連の役割 (特集 阿波踊り)」『徳島地域文化研究』15: 21-28.
- 18 高橋晋一 2006「阿波おどり『にわか連』の人々」『徳島地域文化研究』4: 105-112.
- 19 高橋, 2015.
- 20 出口, 2009.
- 21 H30年2月～8月, 徳島県において実施した。対象は6社の企業連運営担当者, 質問項目は企業連の設立年, 継続年数, 構成員, 練習について, 運営について, 阿波おどりに参加する理由とその意義, 企業が負担する経費・物品である。
- 22 H30年8月～10月, 徳島県において実施した。対象は6社の企業連参加者792名あり, 質問項目は企業連への参加形態, 参加回数, 参加経験, 参加動機, 参加による効果に関する項目, 全71項目であった。選択式の質問項目であった参加動機・参加による効果の回答結果を主な分析の対象とした。本調査の実施にあたり, 国立大学法人お茶の水女子大学人文社会科学部の倫理審査委員会に「人文社会科学部倫理審査」を申請し, 承認を得た(承認番号: 2018-58)。
- 23 参加動機と参加による効果に関するそれぞれの質問項目への回答に基づき, 各因子構造を明らかにし, その因子構造に基づき, 参加動機・効果それぞれの下位尺度を作成した。次に, 作成した下位尺度を用いて, 対応のないt検定により回答者内の群間で回答に差が見られるのかどうかを検証した。
- 24 H30年6月～8月, 徳島県において実施した。3社の企業連を対象に, 練習の観察と練習内容についての聞き取り調査を行った。
- 25 任意で協力を依頼した6社の企業連を対象とした。各企業の本社・支店所在地, 会社規模はそれぞれのホームページで確認した。参加者の範囲と練習場所については質問紙調査と聞き取り調査の結果である。
- 26 A社の参加者は事務局により選出され, 本人の参加意思を持って参加が決定する。参加者は練習の都度各県から徳島に集まってきており, そのため徳島県以外の3県からの参加者は移動時間も含まれ業務扱いということである。
- 27 F社の連では毎年新入社員が参加することが原則になっている。練習に通うのが難しい遠方の支店に配属された者以外, 新入社員は参加必須であるという暗黙の了解が存在するようであった。
- 28 市内10カ所での運行表(平成30年度有料・無料演舞場出演連一覧表)をもとに出演連数, 出演回数, 各連の共同参加の状況を算出した。10カ所の演舞場の内訳は, 4カ所の有料演舞場(藍場浜演舞場, 紺屋町演舞場, 南内町演舞場, 市役所前演舞場), 4カ所の無料演舞場(両国本町演舞場, 元町演舞場, 新町橋西演舞場, 新町橋東演舞場), 2カ所のおどり広場(新町橋東おどり広場, 両国橋南おどり広場)である。
- 29 本拠地を県外におく連には有料演舞場の優先出演権がある為, 「一般連」を県内・県外と分類分けした。また, 宗教法人や, その他の団体が組織する連については「宗教その他の連」でまとめた。その他の団体とは, 阿波踊りを踊る事以外の目的で組織されている団体が, 阿波踊りの期間のみ踊り集団を構成する場合である(サッカー協会やダンス連合会等)。また, 「有名連」「学生連」「一般連」「企業連」に分類できない連や, どのような集団なのか不明な連も「宗教その他の連」に含めた。
- 30 市内10カ所での運行表(平成30年度有料・無料演舞場出演連一覧表)をもとに算出。
- 31 鳴り物とは, 阿波踊りの伴奏であるお囃子を奏でる伴奏集団や演奏者, もしくはお囃子で用いられる楽器そのものを指す。
- 32 徳島市の阿波おどりでは, 市内4カ所の有料演舞場が最も華やかな舞台となる。無料演舞場と比べてライトアップも華々しく, 階段状に配置された栈敷席には観客が並び, その中を踊りぬける体験は参加者にとって深く心に残る体験となる。
- 33 阿波踊りの群舞では, 男踊りや女踊りなど同じ役割の複数名が隊列を組んで踊りながら前進するが, 隊形(フォーメーション)の変更, ジグザグに進むなど踊り方に変化を加えることにより, 見栄えのする洗練された群舞へ練り上げられていく。これらの変化は踊り手たちのかけ声がきっかけとなり, 群舞として整えるには相当量の練習が必要となる。このように群舞に変化を加えることを本研究では演舞構成と称している。
- 34 企業連担当者への聞き取り調査の結果より。
- 35 参加動機には外発的なもの(他人から悪く思われたくないから等)から, 内発的なもの(実施することが自分にとって有益だと考える等)へと移行する段階があるとする西田のスポーツモチベーションにおける自己決定理論を参考にし, 質問項目を独自に作成した(西田 保 2013『スポーツモチベーション—スポーツ行動の秘密に迫る!—東京大修館書店)。
- 36 参加動機が達成されたかという視点と, 聞き取り調査の段階で聴取した「阿波おどりという祭りに参加する事の魅力」を加味し, 質問項目を独自に作成した。
- 37 1から5までの数字の中から, 当てはまるものに丸を付けてもらい回答を得た。(1. 全くあてはまらない-5. 大いにはまる)
- 38 無回答の回答者がいた為, 有効回答数は回収数より少なくなっている。
- 39 因子の抽出には主因子法, 回転にはプロマックス回転を用いた。因子数の決定には固有値1.0以上を基準として, スクリーンプロットの検証, 項目の妥当性の解釈や因子負荷量が十分でないもの, 複数の因子に対して因子負荷量が高いものを除去しながら繰り返し分析を行った結果, 3因子構造が得られた。
- 40 同上。
- 41 下位尺度得点はそれぞれの回答の合計点を算出し, さらに尺度を構成する項目数で除して作成した。5件法で回答を求めた為, 3点以上であればその傾向が強く, 3点以下であれば弱いと解釈出来る。
- 42 三室清子 1967「観光化された盆踊りの研究-徳島県の阿波踊りを中心として」『岡山大学教育学部研究集録』23: 79.
- 43 三室, 1967, 70-79. 現在では踊りの技術が洗練され, 方向転換・回転を取り入れた演舞も見られるが, 動きの応用を伴わない基本の振りに関しては三室が指摘している通りである。
- 44 中村久子 1995「阿波踊りの動きの多様化とその要因一その2—」『舞踊学』18: 56-57.
- 45 内田は, 「よさこい系」祭りでは囃子と呼ばれる楽器を持ち, 音楽の一部に規定の曲を含めさえすれば, リズム, 音楽, 振り付け, 衣装などは自由で, ほとんど制約のない踊りだとその特徴を述べている(内田 忠賢 2003「変化しつづける都市祝祭——高知『よさこい祭り』——」内田忠賢(編)『よさこい/YOSAKOI学リーディングス』東京: 開成出版: 5)。「よさこい系」祭りにおいても, 異なるチームが共に踊れるようにという目的で共通した振り付けも作られているが, 各々のチームの振り付けはコンテストの審査の対象になることもあってオリジナリティが求められ, 個別性が高い。